

# 生産と分配のダイコトミーにたいする 批判の吟味

The critiques to the dichotomy  
of production and distribution  
examined

四野宮 三 郎

## 〔目 次〕

- 一. 問題視点
- 二. マルクスのダイコトミーにたいする批判
- 三. ダイコトミーにたいするシュバルツ解釈
- 四. ダイコトミーにたいする杉原解釈
- 五. ダイコトミーの新解釈にともなう若干の再考

## 一. 問 題 視 点

いわゆるアダム・スミス、ディヴィッド・リカードウによって定礎された「経済学」<sup>1)</sup>の基本前提(私有財産制——商品経済——三階級構成の資本主義体制)にたいする懐疑や批判が、すでに19世紀中葉にジョン・S. ミルやカール・マルクスによって精力的になされたことは周知のことである。両者ともに、新しい経済分析の方法がスミス、リカードウの「経済学」にたいする批判として樹立され、それによる体系化が資本主義体制の変革を志向する新しい経済学であるように構成された。この点を、本稿で取り扱おうとするミルの経済学についていえば、その批判の体系化は『経済学原理』の第一篇・生産と第二篇・分配という篇別構成をとって表明された「生産と分配の二分法」、いわゆる「ダイコトミー」(dichotomy)による体制変革論の展開である<sup>2)</sup>。このダイコトミーは、ミルが1843年に体系化した『論理学体系』第九章に基づいているとみられるが、しかし生産、分配といった篇別の構想はすでに1836年に発表した「経

経済学の定義と研究方法」のなかでも論じられているし<sup>3)</sup>、さらに、それ以前の1834年の「マーティノー『経済学概説』の書評」のなかでも、いわゆる資本主義の永遠性思考での経済分析にたいする批判が表明されているからして<sup>4)</sup>、このダイコトミー的思考は1826-32年の「精神の危機」以後のサン・シモン派の影響に端を発しているともみることができよう<sup>5)</sup>。そしてこのダイコトミーが体系展開の基礎に定置されたのが、1848年の『経済学原理』であった。そこでは、諸国民の経済状態をもたらした原因が、道徳的ないし心理的原因にして、制度および社会関係または人間性の原理に依存しているかぎり、その探求が社会科学、いわゆる経済学の対象になるとされる。いわばこのことは、諸国民の経済状態が物理的知識の状態によるもののみであれば、それは物理的諸科学やそれに基づく技術上の問題とされることになるだろう。しかしながら、富の生産は大地の有する材料から人間の生活のための用具を引きだすことであり、それは物質の性質と、特定の時と所において有する物質の性質についての知識の量によって定まるとみられねばならない。してみると、基本的には、生産は外的自然の諸物の構性と、人間自身の肉体的精神的な諸要因とによって定められる方法と条件のもとで行われるということになるわけで、この点からすると、生産についての経済学のなしうることは、この両属性が組み合わされて生産が行われている条件の究明ということになる。またそこから貧富の問題を歴史的に解明するとか、富の増加の根拠についての法則の解明に向けられることにもなる。これにたいして、富の分配は、生産の場合とは大いに異なっていて、富をどのように分配するかの様式が国民や政府によって選択できる事柄として、そこでの分配様式はそれぞれの社会における法規や慣習に依存しているとみなされるのである。

ミルは、このように生産、分配の法則を規定し、そこから両者の二分法的規定を試みる。つまり、生産法則の自然的性格と、分配法則の人為的性格とが一義的に切り離されたのである。これがミル経済学のフレーム・ワークを規定するダイコトミーの要点であるが、実はこのダイコトミーをめぐる歴史的に大きな批判がなされてきたことは周知のことで、それも特に同時代のマルクスによる厳しい批判とその影響を受けてのものが大きいといわざるをえない。マルクスは、ミルのこのダイコトミーでの分配の歴史的変異性という扱いに敬意を表しながらも、生産の自然法則視、超歴史的性格のものとみなして両者を切り離したことを、方法上の根本的欠陥として厳しく批判したのである。なぜならば、ミルの方法では分配の歴史的変異性に体制変革の拠点を置くことになるわけで、それが生産と切り離されるのであれば、生産過程の分析は変革にとって外在化され、体制変革の数々の重要論点が大方向ヴェールにおおわれてしま

うことにもなるであろうからである。そして日本でも、このダイコトミーを「生産・分配峻別論」といったタームでもって表現して、ミルの理論体系は、変革を装いながら究極的には資本主義体制擁護論をい出るものでないときめつけられてもきた。このことは、批判者たちがマルクスの批判を表面的に受け入れるのみで、安易にミルを批判したともみられないわけでもない。事実このダイコトミーについて、ミルの理論体系全体を視野に一步踏みこんで掘り下げをなした業績には、従来殆んど接することがなかったといってもよいくらいである。

しかしながら、近時ミルという思想家の現代的意義が改めて問いなおされてきたのにつれて、ミルの理論体系の研究も盛んとなり、それだけに各領域にわたって相当に掘り下げられた研究が現われるにいたった。そしてこの状況から、ミル経済学をスミス、リカードウの「経済学」と決定的に訣別せしめることにもなった生産・分配のダイコトミーへの再考察にも及んできたことは、極めて自然の過程であったといわねばならない。この点にかんがみ、本稿では差し当たり、こうした経緯をふまえて、まずマルクスの批判点を確認することにし、そのうえでミルの理論を内在的に考究してダイコトミーについての新しい解釈を試みた幾つかの業績をフォローしよう。そしてそこから、改めてそれらの新解釈によるミル経済学の構性を吟味してみたいとおもうのである。

- 1) スミスおよびリカードウによって定立された経済学は、経済分析が歴史上最初に体系化されたものとして学説史上位置づけられてきたが、本稿ではこのような意味で「 」に入れて表示する。
- 2) このように経済学体系の構成を生産、分配、交換というように分けているのは、ミル以前にもみられた。たとえば、セイは、第1篇・富の生産、第2篇・富の分配、第3篇・富の消費としている (J. B. Say: *Traité d'économie politique*, 2ed. 1814-)。また父ミルも、第1章・生産、第2章・分配、第3章・交換、第4章・消費としている (James Mill: *Element of Political Economy*, 1821)。またラウも、第1部・富の性質、第2部・富の形成、第3部・富の分配、……としている (Karl Heinrich Rau; *Lehrbuch der politischen O'conomie*, 2 vols, 1826-28)。そしてまたシーニョアでは章別構成はとっていないが、富の性質、経済分析の基本的な四命題、富の分配というように論じられている。とくにシーニョアは、「富の性質と生産にかんするもの〔推論〕は普遍的に真理である。そして富の分配にかんするもの〔推論〕は特定国の特定の制度によって影響をこうむりがちである」と規定している。(W. N. Senior: *An Outline of the Science of Political Economy*, 1836)。

この点からすると、ミルのダイコトミーはミル以前にもみられていたことが知られるのであるが、ミルの生産篇、分配篇というダイコトミーの体系全体における規定性からみた場合の独自性は先行者の何れとも相違している点が注目されねばならない。なお、これらについて詳しくは、馬渡尚憲「J. S. ミル『原理』の構成」・東北大・研究年報『経済学』Vol. 50,

- No. 2, 1988. 11. の6-8ページ、早坂忠「J. S. ミル『経済学原理』第四篇をめぐって」・東京大『社会科学紀要』第14輯, 1965. 3. の142-3ページおよび注24, 25などを見られたい。
- 3) 「経済学の定義と研究方法」: “On the Definition of Political Economy; and on the Method of Investigation Proper to it.” これは1836年10月, *London and Westminster Review*. に発表された。ここでのダイコトミー的構想が1843年の『論理学体系』*A System of Logic*. の第6部第9章の3. 「経済学の特徴」で示された方法の基礎となっているとみることができる。
- 4) 「マーティノー『経済学概説』の書評」 “A Review of Miss Martineau's Summary of Political Economy” での批判は, 「地主, 資本家, 労働者からなる……社会の区分を, あたかもそれが人間の掟ではなくして神の掟である」かのように前提している点にむけられている。いわば三階級構成を社会の固定的構成として前提していることは, 資本主義体制の永遠性を許容するもので, したがってそこでは, 三階級打破を目指す体制変革論はでてこないというミルの新しい見地が打ちだされている。See, *CW (Collected Works of J. S. Mill)* の略称。以下, この略称を用いる) IV pp. 225-28. 日本訳: 杉原・山下編『J. S. ミル初期著作集(二)』・熊谷次郎訳「マーティノー女史の経済学」を参照。
- 5) このマーティノー批判は, フランスのサン・シモン派との交流からの影響が大きいとみるのが妥当であろう。ミルは1829-30年の間にシモン派の著作をすでに読んでいるし, またミル自身「やっと世襲の財産制の原理に疑問をもちはじめた」頃がこの派との接触であったと『自伝』で述懐している。*Autobiography, CW I*, p. 179. 朱牟田夏雄訳, 146ページ以下。

## 二. マルクスのダイコトミーにたいする批判

マルクスがミルの生産と分配のダイコトミーを正面から取りあげたのは, マルクスがロンドンに移って以後の本格的な経済学研究のなかであった。それは, 1850年代から始められた「ロンドン・ノート」に続いて, 多くの経済学説をノートした本格的な経済学研究と目される「1857-58年経済学草稿」である。この草稿は, 「バスティアとケアリ」, 「序説」および「経済学批判要綱」よりなり, そのなかの「序説」にミルのダイコトミー批判がなされ, この批判的見地の定式化が, のちの『資本論』第Ⅲ部第7篇第51章「分配諸関係と生産諸関係」となったのである。

### 1. 「序説」におけるダイコトミー批判

この「序説」は1857年8月末から起草されたのであるが, この「序説」についてMEGA 編者は次のように付記している。「分配を前面におしだし, 資本主義を歴史的秩序とはみなさないブルジョア経済学者に反対して, マルクスは, 社会的生産の第一義的性格から出発する。生産, 分配, 交換, 消費の弁証法的相互作用の分析は, 生



産は出発点をなすだけでなく、それらの統一の規定的な契機でもあること、分配諸形態は生産諸形態の別表現を示すにすぎないこと、という結論に彼を導いた。彼は生産を社会的に規定されたものとして認識し、それを彼の研究対象へひきあげた。」<sup>1)</sup>と。これはマルクスの理論を的確に要約しているが、われわれはすすんでマルクス自身の理論設定とミル批判とに接してみよう。

まず「序説」(ノートM)・Iの1「生産」のなかで、マルクスは当時までの経済学者の「生産」の取り扱い方について、こう指摘する。「一般的な部篇をまず初めに取りあげることが——そして『生産』という題で出てくるのがまさにそれである——(たとえば J. St. ミルを見よ)、経済学の流行であり、そこではすべての生産の一般的条件が扱われる」というのが共通した一つの扱い方だという。つまり、生産、分配、交換ないし消費という篇別構成をとっているというのである(この点については、本稿の一「問題視点」の注2)をみられたい)。そしてこうした一般的な篇別において扱われている内容は、「(1)生産が可能であるために欠くことのできない諸条件。それも実際には、すべての生産の本質的諸契機をあげるだけのことである。」、「(2)生産の増加を速めたり、また遅くしたりする諸条件。たとえば、アダム・スミスの進歩しつつある社会状態と停滞している社会状態のように。」そしてさらにマルクスは、しかしこの一般的な部篇のなかで経済学者たちが現実に取り扱っている問題は、これですべてではないとして、こう付け加えている。すなわち「生産はむしろ——たとえばミルを見よ——分配などとはちがって、歴史から独立した永遠の自然法則のわくにはめこまれているものとして叙述されるべきだとされ、しかもこのばあい、ブルジョアの諸関係が、社会一般(Gesellschaft in abstracto)のくつがえすことのできない自然法則として、まったくこっそりおしこまれる。これがやり方全体の多かれ少なかれ意識された目的である。その反対に、分配では人間はじつにありとあらゆる恣意的なことをしてきたというのである。」と<sup>2)</sup>。

以上のような経済学者たちの一般的篇別内容にたいする批判は、われわれにとってそれ程理解を超えるものではない。しかし上記のマルクスの指摘には次のような主張が控えていることも知らねばならない。それは「序説」のIの2について、2のbでの彼の分析である。そこでは、生産手段の分配、生産物の分配というように「分配」が二つに区別されて論じられる。つまり生産手段の視点からすると、ある種の生産手段の分配があって、それによってそれに添う労働力の分配という生産の仕組みがみられて、そこから生産物の分配が与えられることになるのである。このことをマルクスは次のように述べる。「分配は、諸生産物の分配である前に、(1)生産諸用具の分配で

あり、そして、(2) 同じ関係のいっそう進んだ規定であるが、いろいろの種類の生産への社会成員の分配である。(一定の生産諸関係への諸個人の包摂。) 諸生産物の分配は明らかに生産過程それ自体の内部に含まれていて、生産の編制も規定しているこうした分配の結果にすぎない。」したがって、マルクスはこうした関連を無視した生産、分配の規定をこう批判する。「生産に含まれているこのような分配を無視して生産を考察することは、明らかに空虚な抽象であるのだが、他方反対に、諸生産物の分配は、もともと生産の一契機をなしている分配とともに、おのずからあたえられているのである。」と<sup>3)</sup>。

このようにスミス以来の経済学の伝統では、生産と分配が分離された関係で内容規定がなされて、分配は生産過程の結果としてみてきたが、しかし生産の前提には生産手段と生産する人間の分配が先行するのであって、それらの分配のされ方が生産過程の結果としての生産物の分配のあり方を決めるのである。したがって、ミルのような生産と分配のまったく別の法則規定と篤別分割は、マルクスにとってまったく受け入れられることのできないものであったといわねばならない。そしてこの見方は、経済学批判体系の著作の意図のもとに執筆された『経済学批判』の「1861-63年草稿」の第6冊から第15冊にある「剰余価値に関する諸学説」のなかでも、次のような簡潔な文言で繰り返されている。すなわち、「J. St. ミルなどが、ブルジョワ的生産の諸形態を絶対的なものとして把握しながら、しかもブルジョワ的な分配諸形態を相対的で歴史的な、したがって過渡的なものとして把握しているのは、いかにもばかげている。分配形態はただ別の視点からみた (sub alia specie) 生産形態であるにすぎない。」<sup>4)</sup>

## 2. 『資本論』第Ⅲ部第51章での定式化

ここでの基本的視点は、すでにふれた「1857-58年経済学草稿」の「序説」(ノートM)で述べられている点と同じで、まず分配を二つに分けて規定する。ひとつは、特殊な歴史的社会的諸機能の基礎となる分配諸関係で、さきの「ノートM」であげた生産諸手段および労働力の分配のことで、これの分配のあり方が歴史的社会的生産様式を決定し、その生産様式に照応する生産諸関係を定立するのである。このことをマルクスはこう規定する。「この分配を、ひとが分配諸関係といって、生産諸関係に対立するものとしてのその歴史的な性格を云々する場合に意味するものとは、ぜんぜん相異なるものである。……この分配諸関係は生産の全性格および全運動を規定するのである。」と<sup>5)</sup>。

そしてふたつは、いわゆる経済学でいう分配であって、それは生産過程の結果とし

ての諸生産物の分配という形態をとるものである。ここのところでマルクスがとくに指摘していることは、「分配諸関係の考察にさいして、人々はまず、年々の生産物は労賃・利潤および地代として分配されるという事実から出発するが、そういう事実なるものは誤りである」ということである。事実はそうでなくて、「生産物は分かれて一方では資本となり、他方では諸所得となる」ということ、したがって、たとえば労賃についていえば、「これらの所得の一つである 労賃そのものが所得——労働者の所得たる形態をとるのは、つねに、それがあらかじめ同じ労働者にたいし資本の形態で対応した後にすぎない」ということである。このようにマルクスは、「生産物の一方の部分が資本に転化しないならば、他方の部分が労賃・利潤および地代という諸形態をとることもない」と規定し、諸生産物の分配は生産手段の分配を前提とし、それに規定されることを明確にするのである<sup>6)</sup>。

こうしてマルクスは生産と分配の関係についての経済学的分析を批判的に考証して、この第51章の末尾に、その総括的な定式化をなしている。すなわち、「かくして、いわゆる分配諸関係は、生産過程の、および人間が彼らの人間生活の再生産過程で相互にとり結ぶ諸関係の、歴史的に規定された・独自の社会的な・諸形態に照応し、またこうした諸形態から発生する。この分配諸関係の歴史的な性格は、生産諸関係——その一面のみを分配諸関係は表現する——の歴史的な性格である。資本制的分配は、他の生産様式から生じる分配諸関係とは相違するのであって、各分配形態は、それが由来しかつ照応する規定された生産形態とともに消滅するものである。／分配諸関係のみを歴史的なものとなし、生産諸関係をそうみなさない見解は、一方では、ブルジョワ経済学の、発端的な・といってもまだ囚われている・批判上の見解にすぎない。だが他方では、この見解は、社会的生産過程と単純な労働過程——異常な孤立の人間でもあらゆる社会的援助なしに行われねばならぬような労働過程——との、混同および同一視に立脚する。労働過程が人間と自然との単なる一過程であるにすぎないかぎりでは、労働過程の単純な諸要素は、労働過程のあらゆる社会的発展形態に照応している。だが、この労働過程のあらゆる規定された歴史的な形態は、労働過程それ自身の物質的基礎および社会的形態を発展させる。」と<sup>7)</sup>。ここでの前半の指摘は分配諸関係はたしかに歴史的・一時的な性格のものであるが、そうであるのは生産諸関係そのものが歴史的・一時的な性格であるがゆえであって、いわば形態の異なった同じ法則というべきであり、一つの歴史的過程の諸契機であるにすぎないことの定式化といえよう。そしてそれ故に、後半のように、ミルの生産と分配のダイコトミーがいかに誤った定式化であるかが抗弁の余地なく指摘されてくるのであって、今日まで多くの研究者たちに

よるミルの生産と分配のダイコトミーにたいする根強い批判は、このような理論的解釈に依拠していたといつてよいであろう。

### 3. M・ドップの付加的コメント

現代のマルクス派理論家の一人であるモーリス・ドップは、さきのマルクスの厳正なミル批判を受けいれながらも、この分配の歴史的変性という定立が、ミルの社会主義志向の突破口となっていることに注目している。

ドップは、その著『スミス以来の価値と分配の理論』のなかで、ミル自身の叙述：「真に自然法則であり、物の性質に依存するところの、富の生産の法則と、一定の諸条件に左右され、人間の意志に依存する富の分配の様式とを、適確に区別する」<sup>9)</sup> といった色調は、これまでの経済学のあらゆる叙述から区別される全体的色調をもつものとして、マルクスをして、「[J. S. ミルのような人々を] 俗流経済学的弁護論者たちの仲間に入れて分類すれば誤りでであろう」<sup>9)</sup> と評価せしめることになった点を確認し、「マルクスにとっては、先ほど引用した〔ミルの〕記述のような述べ方は、分配と生産の社会的諸関係とのあいだの結びつきを示すものとしては不適切なものであったけれども、マルクスはそうに認めた」<sup>10)</sup> と付け加えている。そしてドップは、こうしたミルの色調は妻ハリエット夫人の絶大な影響によるものであったことを認め、ミルは彼女の影響のもとで生産と分配のダイコトミーを確立することを通して、「[以前は] 民主主義者ではあったが、決して社会主義者でなかった」が、「はるかに民主主義の域を越えて、はっきりと社会主義という一般の呼称の中にわれわれをおくものだった。……われわれは、社会がもはや働かない者と働く者とに分けられるのではない時代を待望した。」<sup>11)</sup> というミルの思想の歩みを把握するのである。

こうして現代のマルクシスト・ドップは、マルクスによって厳しい批判にさらされた生産と分配のダイコトミーが、実は社会体制考察の突破口として社会主義への道を展望せしめたことに注目しているのであるが、このような見方は、実は日本においても、杉原四郎氏などによって、『経済学原理』における生産・分配二分論は、「社会主義の問題を経済学的に論じうる理論的枠組みを生み出す」基礎となっていると注目されている<sup>12)</sup>。それだけにまた、われわれとしては、このダイコトミーにたいするマルクスの批判、またダイコトミーを基礎としてのミルの経済学体系の構成といった問題について、これらをどう秩序的に解明し、そこから新しい社会体制の展望にどう取り込むかということが一つの課題とされてくる、ということにもなってくるのである。

- 1) “*Das Kapital*” und *Vorarbeiten*, Band I; Ökonomische Manuskripte 1857/58, Teil I (Dietz Verlag Berlin, 1976) S. 18\*, 『マルクス資本論草稿集(1)』(大月書店), 18\*ページ。
- 2) *op. cit.* S. 24, 前掲訳書, 29-31ページ。
- 3) *op. cit.* SS. 22-33, 訳, 44ページ。
- 4) *Zur Kritik der Politischen Ökonomie* (Manuskript 1861-1863) Teil 4, S. 1276, 『マルクス資本論草稿集(7)』119ページ。
- 5) *Das Kapital*, Buch III, Kap. 51: “Distributionsverhältnisse und Produktionsverhältnisse.” (Dietz Verlag Berlin, 1957) SS. 935-36. 長谷部文雄訳(日本評論社版) (1) 519ページ。
- 6) *op. cit.* SS. 934-35, 訳書(11), 518ページ。
- 7) *op. cit.* S. 940, 訳書(11), 527ページ。
- 8) Mill: *Autobiography*; *CW* I, p. 255. 朱牟田夏雄訳, 214ページ。
- 9) *Das Kapital*, Buch I, S. 642 note 65. 長谷部訳(4) 98ページ, 注65。
- 10) M. Dobb: *Theories of Value and Distribution since Adam Smith*, 1972, p. 125. 岸本陳重訳『価値と分配の理論』(1976) 150ページ。
- 11) Mill: *Autobiography*, *CW* I. p. 239. 朱牟田訳 201-2ページ。
- 12) 杉原四郎『J. S. ミルと現代』(1980) 62ページ。

### 三. ダイコトミーにたいするシュバルツ解釈

ペドロ・シュバルツ氏は、その主著: *The New Political Economy of J. S. Mill*. (1972) において、従来の支配的な経済学説にたいするミルの最も重要な革新が、生産法則と分配法則の間の区別 (distinction) にあることを認めたうえで<sup>1)</sup>、彼の新しい経済学の基礎となるこの二つの法則の区別には、有益な (good) 点と不十分な (bad) 点とをもっていることを指摘している<sup>2)</sup>。このシュバルツの指摘は、従来批判のみ多くて、あまり踏みこんだ考証の少なかったミルのダイコトミーを、内在的に分析しようとするものの現われとして注目されてよいであろう。まずこの二つの点について、シュバルツはこう述べている。「ミルが人知を越えた (transcendental) と見なしたこの区別は、……一方では、競争や私的所有および財産相続といった制度は、経済科学の公準たりえないものであると彼は強調した。しかし他方で、ミルは生産と分配とが同じコインの両面にすぎず、しかも両者とも固定した法則によって支配されると考えられねばならぬとか、両者とも制度の変更を受け易いとみられるとか、について注意を深めなかったことを示しているように思われるだろう」と<sup>3)</sup>。こうしたミルの古い経済学的ドグマの否定と、なお否定しきれない不透明な分析側面を残した

態度を、シュバルツはミルの思想過程の歴史に踏みこんで解明しようとしているのである。

### 1. 社会科学の方法的基礎の定立

まずシュバルツが着目したのが、ミルにおける社会科学の方法の樹立であった。そのミルによる新しい方法の樹立の契機となったのが、父ミル (James Mill) の先験的な方法 (*a priori method*) とマコーレー (Thomas B. Macaulay) の後驗的帰納法 (*a posteriori induction*) との論争であった<sup>4)</sup>。この先験的方法は、ある種の前提から論理的手続きをえて、結論を導きだそうとするもので、父ミルの場合は、統治の行なわれなければならない意味を、それが人間の目的を達成する手段とかかわらしめて、人間存在の目的が明らかにされてはじめて統治の目的が確定されるとした。しかしこの方法で重要な点は、前提となる人間性についての分析の完全さいかにある。いわば不完全な前提からの演繹 (deduction) は、えられた結果が現実の事実と合致しないものとなる。この点がマコーレーに鋭く批判されるところとなった。マコーレーによると、この難点は、たとえば水素と酸素とが化合されて水となった場合、結果としての水とその合成要素とはまったく異質のものになっているからして、いくら水素や酸素などの個別要素を分析しても、水の法則性を捉えることはできないところにある。したがってマコーレーは、水の法則性は直接に帰納的 (inductive) に水を考察するしかないと同じく、政治法則も直接帰納的に政治現象を考察していくことによって捉えられると主張した。

こうした対立する二つの法則把握にたいして、ミルは、政治現象なり社会現象はいかほど複合的現象であったとしても、その合成要素としての人間性の法則 (the Laws of Human Nature) とまったく異質の法則が作用するとみるのは間違いだとする。しかし留意しなければならないのは、個別要素が複合化される場合に、その合成が単純加算されるとは限らないことである。したがって、その結果としてえられた合成結果が現実からの偏差 (variation) を生みだすことを認めざるをえないわけで、いわゆるシュバルツのいう「与えられた条件において攪乱要因が介入するとき、先験的方法は十分とはいえず、そこでは観察 (observation) によって抽象的モデルの偏差の限度が決定されねばならなくなる」のである<sup>5)</sup>。こうしてミルは、この論争をえて彼独自の方法：「具体的演繹法」(concrete deductive method) を樹立した。この方法は、まず基本的な個別要素についての法則を観察と実験によって帰納的に把握する。ここからえられた法則がさらに歴史的状況のなかで合成されて、その結果として

えられる社会ないし政治法則を演繹的に把握する。こうして得られた合成的法則と現実からの偏差とを観察によって帰納的に明らかにして、それを科学的法則へと高めていくのである<sup>9)</sup>。

このような経済学の方法の樹立によってはじめて、「父ミルの〔そしてほかならずスミス、リカードウの〕教説を基礎づけていた心理的前提における利己心の支配性とか、また同じように、制度的前提における完全競争ないし私的所有および財産相続とか、あるいは社会学的前提における三つの分裂した階級の存立といった、仮説的前提の普遍性を否定する見解」を持つにいたったのであり、あるいは逆に「リカードウの教説の本質である二つの法則・収穫逡減と人口の法則(the two laws of diminishing returns and population) をそのまま受けいれもした」のである<sup>9)</sup>。このようにシュバルツは、生産と分配のダイコトミーをミルの新しい経済学の方法の具体的適用というように解釈しているといつてよい。

## 2. 新しい分配概念の把握

ミルが、生産と分配のダイコトミーによって、分配の制度的可変性を基軸点として新しい体制選択を志向したことはすでに指摘したが、その分配の可変性の方法的基礎は前述のミルの新しい社会科学の方法に基礎づけられたのであって、それをより現実的に展開する契機を与えたのが、サン・シモン派であり、またある意味でアダム・スミスでもあったと、シュバルツは指摘する。

サン・シモン派にたいする初期のミルは必ずしも好意的でなかった。だから「相続」(inheritance) についても、この派の教義は大変異端的な考えのように受けとめた。しかしその後、ミルはオーギュスト・コントがサン・シモンと共同で著述した『実証政治学』(*Système de Politique Positive*.) に深い感銘を受け、歴史的進化(historical evolution) について開眼させられたとシュバルツは指摘しているが<sup>9)</sup>、これがいわゆる私有財産や相続といった当時の制度的仮説や資本家、地主、労働者といった社会階級構成の恒久的前提視による分析モデル（とくにリカードウ・モデル）への疑問となり、否定的開眼であったのである。この点はミル自身『自叙伝』のなかでも、「普通の意味の自由主義思想にたいする彼らの批評には、重要な真理が多分にふくまれているように私には思えた。私有財産や遺産相続を動かしがたい事実と考え、生産と交換の自由を社会進歩の決め手となる警句(dernier mot) と考える古い経済学は、非常に局限された一時的価値しか持たぬことにはじめて私の眼が開いた」と述懐している<sup>9)</sup>。

こうしてミルの分配をめぐる新しい見地は、すぐにマーティノー女史の『経済

『学概説』の書評において、「社会制度の不変性を当然のこと」とみる見解への叱責や、「社会が三階級に分化されているのがあたかも神の法」であるとみていたことへの批判となって現われたことは、すでに指摘したが、このミルの批判的思考に、シュバルツは「それ自体経済学にとって重要な貢献をなすだろうし、とりわけその時代の普及した経済的信条と対比するときにそうであろう」と評している<sup>109</sup>。

こうしたサン・シモン派の影響とならんで、ミルにまた大きな影響を与えたのがアダム・スミスだとシュバルツは指摘し、「スミスに帰することは、一方で、特定の具体的状態にはそれに適合する新しい分配機構と階級制度の概念を用い、他方で、経済的前提のみでなく、社会的、倫理のおよび哲学的前提からもなされるようになる」ことを意味し、ミルの『経済学原理』が「原理と応用とを組み合わせ」た分析的モデルを目指したのがその現われとみるのである<sup>110</sup>。

こうした二つの主要な思想的影響と開眼のもとに、ミルは、経済分析モデルの構築を生産の法則と分配の法則との区別を新しい足がかりとして進めたのである。したがってそこでは、従来慣習的にとられてきた分析的手法とは違った手法がとられることになるのは当然といわねばならない。こうして、この生産と分配のダイコトミーは、つねに前向きであろうとするミルの思想史のなかで醸成されて現われてきた帰結であり成果でこそあれ、決して一時的偶然的思いつきのものではなかったといえるのである。シュバルツもまたこのことを強調しているといつてよいだろう。

このようにシュバルツは、この生産と分配のダイコトミーの定立過程の考察をなしたあと、生産の法則と分配の法則の区別について吟味する。そして彼は、この生産と分配とを区別する内容に着目して、「分配の法則はそんなにフレキシブルでもないし、さりとて生産の法則もそんなにリジッドではない」からして、生産の法則は物理的真理の性格のもので、人間にとって恣意的なものはないとか、分配の法則は人間の制度によるもので恣意性をもつものというような、両者の「区別は誤りであった」と断じ、同時に彼は、「ミル自身が、分配がすべて恣意的な選択の事柄とみなすことが間違いである」ことを思わせるような「若干のパラグラフを公言している」と指摘している<sup>122</sup>。そのパラグラフではこう述べられている。「[ミルいわく] 社会は、自ら最良と考える規則を選び、富の分配をこれに従わしめることができる。しかしこのような規則の作用からどんな実際の結果が生ずるかということは、社会は選択できないし、学ぶようにしなければならない」と<sup>123</sup>。このパラグラフは、シュバルツの指摘のように、分配法則の可変視に異議をとなえる有力な規定であって、ミルのダイコトミーを問題とする他の研究者にもおしなべて引用されるパラグラフである。何れに



しても、生産、分配のダイコトミーを問題にする場合のミルの定式化への反証として、この命題とのかかわりを解くことが一つの重要な問題といえるであろう。

つぎに生産の法則についても、シュバルツは、「ミルは過渡の硬直性を与えた」として、「生産の諸法則は、ミルが物理的真理との類似点を述べた際に示唆したような性格は持っていない。人間の生産的行動は、ある与えられた時点に存在している法則のような一定不変性として限定される、と仮定することは誤りである。換言すれば、農業における収穫逡減のような諸傾向とか、技術的進歩の速さなどは、それらが過去においてなされたのと同じように、将来においても必然的になされる一定不変のものと信じるのは誤解である。」<sup>14)</sup>とミルの定式化を訂正しようとする。そしてシュバルツは、分配の場合と同じように、生産法則についての最初の発言をミル自身訂正するようなパラグラフを示すのである。すなわち、「確かにわれわれは、将来における自然法則にかんする知識の増進や現在考え及ばないような産業上の新しい工程を示すことによって、生産の様式がどの程度変わるのか、あるいは労働の生産性がどのくらい増大するのか、ということを見ようとしてもできるものではない。」<sup>15)</sup>

このように分配の法則と生産の法則とは、前者がフレキシブルにみえても他面でリジッドな側面をもっており、また後者にしても、リジッドであるかのように規定されながらフレキシブルの側面をもっているのであって、両法則は、ミルのように、まったく違った性格のものとして裁断されえないし、またされてはならないというのが、シュバルツの解釈のように思われる。

- 1) この生産と分配の法則の区別が、シュバルツの著書の Chap. 4 の小節として、“The Methodological Bases of the New Political Economy.” のタイトルのもとで考察されていることから知られる。
- 2) Pedro Schwartz: *The New Political Economy of J. S. Mill*, 1972, p. 59.
- 3) do: *op. cit.*, p. 59.
- 4) J. S. Mill: *System of Logic*, Book VI, Chap. 7, 8. CW VIII pp. 879-94. 大関将一訳⑥112ページ。なお、この論争については、拙著『J. S. ミル体系序説』Ⅱの2「ミルの社会科学の方法」を参照されたい。
- 5) Schwartz: *op. cit.*, p. 61.
- 6) 社会ないし政治現象における基本的な個別要素の観察と実験には「心理学」(psychology) 的方法をミルは提示したが、これにはいろいろの批判がなされてきている。また現実からの偏差の観察：いわゆる「検証」(verification) がいかになされるかについて、ミルは直接的検証と間接的検証という二つの方法をあげる。そして前者では、照合に用いられる経験的观察のための事例の集収とか、実験の事情が理論において考察されている事情と厳密に同一でなければならないのだが、非可逆的な社会現象では不可能で、ミルはこの方法は現実的有効

性をもたないとしている。後者は、同じ理論＝仮説的法則から導かれる他の個別的諸例においてえられる結論を検証することで、間接にその理論の信頼性を確かめるというものである。それはある特殊な原因の影響についての理論が、この原因が影響を与える傾向をもっている諸現象の現実の状態を説明できれば、この仮説的法則の信頼性についての検証の役割は果たされうるとみるのである。なお、これについては、拙著・前掲書、107-10ページを参照。

- 7) Schwartz: *op. cit.*, p. 61.
- 8) *op. cit.* pp. 61-62.
- 9) Mill: *Autobiography*, CW I, pp. 174-75. 朱牟田訳 148-49ページ。
- 10) Schwartz: *op. cit.*, p. 62.
- 11) *op. cit.*, pp. 62-63.

こうしたスミスの影響ともいべき「原理と応用の組み合わせ」による分析モデル化は、『原理』の第4篇において精彩をはなつがごとく展開されていることは周知のところであるが、こうした傾向はマルクスにもみられたといえよう。たとえば、『経哲草稿』(*Ökonomisch-philosophisches Manuskript*)の第一草稿のなかの「疎外された労働」断片\*などは、経済学的分析であるとともに倫理的人間的分析といえるであろう。

- 12) Schwartz: *op. cit.*, p. 64.
- 13) Mill: *Principles of Political Economy*, 1st. ed, 1848, CW II, p. 200 fn. K-K. 末永茂喜訳② 14ページ、および16ページ注[一]。
- 14) Schwartz: *op. cit.*, pp. 64-65.
- 15) Mill: *Principles*; CW II, p. 199. 末永訳② 14ページ。

#### 四. ダイコトミーにたいする杉原解釈

この生産、分配のダイコトミーについては、さらにホルンダーの近著、Samuel Hollander: *The Economics of John Stuart Mill*, 1985. も注目される。ホルンダーは、同書の FOUR-VI: The Law of Production and Distribution. のなかで、ミルによる生産および分配の法則の間の区別の定式化をフォローして、生産における「順応的」(malleable)である事実、また分配もまた「因果分析」(causal analysis)に従うものであること、などを明らかにして、「生産と分配の法則の区別は、文字通り解してみると、もろい(brittle)区別である」という結論が避けることができないとみている(p. 222)。この点からして、そうした結論への分析過程はさておくとしても、かなりシュバルツの解釈に近いといえることができる。ただこのホルンダーの解釈について本稿で考察することは紙数の都合でできがたいので、別の機会にゆずりたい。幸いホルンダー解釈の精緻な分析が馬渡尚憲氏によってなされているので、それを参考にしたいとおもう。またミルの生産、分配のダイコトミーについて鋭い批判的解明をなされた早坂忠氏や井上琢智氏の諸論稿があるが<sup>1)</sup>、紙数の都合で、ここ

では、一步踏んだ解釈として注目される杉原四郎氏の分析を考察することにする。

### 1. 生産と分配の関連にたいするミルとマルクス

生産と分配のダイコトミーにたいする杉原解釈は、1974年に発表された論文「生産と分配」のなかで行われている<sup>3)</sup>。しかもその分析は、マルクスによるミルの方法上の批判を重視して、『資本論』第Ⅲ部第51章「分配諸関係と生産諸関係」における両関係の定式化にミルの定式化を引きよせて、ミルの方法を再解釈しようとしているところに特徴がある。

まず資本制生産様式のもとでは、分配関係はその背後に資本関係という特定の生産関係があつて、それに規定されるものであり、この関係の把握がなされてはじめて、交換関係——価値関係、階級関係——搾取関係、労使関係——剰余価値関係という関係が把握されるのであり、この点の理解があつたか否かがミルとマルクスの基本的な相違をもたらしていると彼は指摘する<sup>3)</sup>。この点は本稿の二の2で、マルクスのミル方法への批判としてあげたところであるが、杉原解釈はここから一步すすめて、「二人の経済学の基本性格に由来する……ちがいを確認したうえで、それぞれの所説に立ち入って検討を加えてゆくと、……両者の所説のかなりの重なり合う面がうかび上ってくる」として<sup>4)</sup>、マルクスの生産様式・生産関係・分配関係と、ミルの生産・分配との照応関係を積極的に分析するのである。

そこで彼の分析的パラグラフを私なりに解釈してみると次のようになろう。分配には、まず生産手段の分配があつて、それによる労働力の分配がみられ、そこに所有関係が法的に規定されて、一方で生産手段の所有者としての人間と、他方で労働力の所有者としての人間とが分離することになり、それゆえにまたそれらが社会的に生産力を実現するために結合されることになる。こういう意味での生産関係は、「所有関係」を軸とした「生産的分配関係」(杉原)を表現するものといえる。しかし同時に、一定の法的に規定された所有関係において分離せしめられた両者が結合されることは、他でもなく人間の自然にたいする生産的活動の実践を可能とするものにほかならない。ここにいわゆる「労働関係」の意義と機能が特徴づけられる。こうして、このような社会的規定性をもつ労働関係を前提として生産力を実現していく社会的枠組が、「生産様式」として把握されてくるのである。

このような把握のうえにたつて、論点が次のように整理される。「生産関係には労働関係としてとらえられる側面と所有関係としてとらえられる側面とがあり、前者は生産関係と生産様式とをむすびつけ、後者は生産関係と分配関係とをむすびつけるも

のということができよう。生産関係の要点はもとより所有関係にあるのだが、生産関係としての具体的内実<sup>91</sup>は労働関係をぬきにしてはなりたたないのである。」と。

このようなマルクスの生産様式—生産関係—分配関係は、ミルの生産—分配論とどう照応するのであろうか。まず『経済学原理』の第一篇「生産」についてみると、ミルは、各種の生産要素とその効率を増進する手段について考察しているなかで、協業すなわち労働の結合の生産性に及ぼす効果を重視して、単純協業や諸種の分業的協業の効果を論じ、そこから大規模生産と小規模生産の何れが労働の効率を増進させるかを比較詳論している。そしてその所説は、マルクスの『資本論』第Ⅰ部第4篇で論じている単純協業や分業を論じているところと相蔽う部分が多い、と杉原は指摘する<sup>92</sup>。たしかに、ミルが、資本の分析につづいて分業とか協業の分析をなし、それを視点にしての生産規模の分析をなしていることは、資本の存在を背景にそのもとでの生産手段や労働力の分配がなされていることを前提にしているものであり、それらの組合せ方による生産性向上いかなの比較分析は、いわゆるより高い生産力を実現する社会的な生産の枠組を明らかにしようとするものにほかならない。したがって、この意味では、マルクスの規定する生産様式を生産的分配関係における労働関係から接近してゆく方法と同じ分析方法で、ミル自身が生産法則の人間の踏みこめない自然法則的なものとみなしたのは違った法則的解明が試みられているといつてよい。

ついで杉原はミルの分配論の考察に移り、その照応関係を明らかにする。ミルは、第二篇「分配」の冒頭で、所有制度の問題をとりあげ、「社会の経済的諸施設がよって立つ基礎であった第一次的な基本的制度」である私有財産制について詳しく吟味したうえで、私有財産制を前提した諸種の分配制度を論じている。このような分配論の内容から杉原はこう指摘される。「それらはマルクスの場合では所有関係としての生産関係の問題であって、つまりミルの場合でも決して労働過程論と本来的分配論だけしかないのではなく、生産関係もまた第二篇の分配論の中で展開されている。」と。そして、これらの両者の照応関係を図示し、さきのマルクスの所有関係としてとらえられる生産関係が分配関係と結びつく部分が、ミルの分配にも相当するというのである<sup>93</sup>。たしかに生産要具（土地、道具など）の分配のあり方、それにともなう労働のあり方が決められると、それによって生産物の分配のされ方が決ってくることを、ミルは第一章「所有」で論証している。つまり、「〔生産要具と労働の〕分配がひとたび実施されると」「生産物の分配も、やはり同じように」それに規定されるというのである。

このように私の理解する杉原解釈は、シュバルツやホランダールがミルによる生産の

自然法則視、分配の人間恣意的法則視の定式化を批判して、「不十分な」定式化であるとか、「もろい」定式化とみなしたいように、その批判を認めたくえて、さらに一步考証をすすめて、果してミルの生産と分配のダイコトミーが、マルクスの厳しい批判にさらされねばならないものかどうかを解明したものとして注目されてよいと考える。

## 2. ミルの生産論のマルクス解釈への寄与

このように杉原は、ミルとマルクスの照応関係の考証を積極的にすすめるばかりでなく、氏はさらにすすんで、ミルの生産論が従来のマルクス解釈に寄与する点のみられることを強調しようとしている。それは、「ミルはその生産論において、人間の生産に対する自然の原本的制限性、いわゆる『自然の吝嗇』(niggardliness of nature)について語っている」ことに注目して、「人間の生活は自然との間の物質代謝によってなり立つのであり、したがって種々の自然条件が労働の生産性を基本的に制約するものである」ことは否定できないとしたうえで、「生産力の発展が人間の発展と解放にとってもつ真の意味を追求する場合、自然条件が人間に対してもっている歴史貫通的な重みを『人間の進歩』との関連で深刻に考えている」点が改めて再認識されるべきだというのである<sup>9)</sup>。もちろんマルクスにしても、「持続的な土地肥沃度の永久的自然条件」つまり「人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰」：「人間と土地とのあいだの物質代謝」が人間の、生物の生存に極めて重大な問題であることを強調していたが<sup>9)</sup>、この点は従来のマルクス解釈では比較的に閑却にされてきたと彼は指摘する<sup>10)</sup>。いうなれば、ミルがその生産論のなかで、さきの自然条件が人間にたいしてもつ歴史貫通的な重みが人間の進歩との関連で深刻に問題としたことは、ミルが生産を「物の再生産のみならず、人間による人間の再生産の問題をとりあげ、この問題は、人間にとって社会体制の如何をこえた根本的な問題であることをあきらかにし」ているのであって、まさにこれは「マルクスの立場からも十分にかえりみられるべきものであろう」ということにほかならない<sup>11)</sup>。杉原はその後1979年に「自然と人間」と題して、この見解をいっそう彫琢されたかたちで発表している<sup>12)</sup>。こうした彼の考証態度は、杉原がミルとマルクスとについての伝統的評価を突き破って、現代の緊急的課題から改めて両者における生産と分配の対応に新たなメスを入れようとするものであることを知らねばならない。

1) 馬渡氏のものは、同「J. S. ミル『原理』の構成」・東北大・研究年報『経済学』Vol. 50,

No. 2. 1988年11月。同論文のⅡを参照されたい。さらに早坂、井上論文は次のものがある。  
早坂「J. S. ミル『経済学原理』第四篇をめぐって」・東大『社会科学紀要』第14輯，昭40。  
井上「J. S. ミルにおける『自由・必然』問題と『生産・分配二分法』問題」・関西学院大『経済学研究』7号，昭49。

- 2) 杉原四郎「生産と分配」：都留・杉原編『経済学の現代的課題』（1974），所収。なお，この論文は，氏の著書『社会科学の道標』（1977）に収録されている。
- 3) 杉原『社会科学の道標』140-41ページ。
- 4) 同：前掲書，143ページ。
- 5) 同：前掲書，146ページ。
- 6) 同：前掲書，146ページ。
- 7) 同：前掲書，146-47ページ。
- 8) 同：前掲書，147ページ。
- 9) Marx: *Das Kapital* (Werke) I, S. 528. 新日本出版社版・③ 868ページ。
- 10) 杉原：前掲書，147ページ。
- 11) 同：前掲書，148ページ。

## 五. ダイコトミーの新解釈にともなう若干の再考

以上はミルの生産と分配のダイコトミーについての最近の研究の主なるものを私なりに考察したのであるが，それらの諸論稿に共通してみられることは，このダイコトミーについて『経済学原理』の「緒論」の末尾や第二篇第1章「所有」の「序説」での定式化と，『原理』の理論内容とが必ずしも一致しないという点の指摘がなされていることである。しかしながら，なぜそのような違いが生じてきたかについては，まだそれほど究明されているとはいえないが，一つの見方としては，早坂，馬渡，井上などの諸氏の指摘が示唆的であるといってよいだろう<sup>1)</sup>。早坂所見では，「少なくとも経済学の実質的理論の面から見るかぎりミルが『原理』の中に導入した生産論と分配論の分離やそれに伴う諸命題の配列の仕方などは，ある意味で偶然の思いつきにすぎなかったと言ってもあながち不当とのみは言えない」と，いわばそれは「ミルの実質的理論内容にとっては多分に外在的なもの」というのである<sup>2)</sup>。しかし馬渡説では必ずしも早坂的な割り切った見方とはなっていない。彼の見解はこうである。まず生産と分配の分離の理由としては，「生産論では，人間は自然に制約される。人間は『知識』『物質の性質についての』によって徐々に自然をかえるにすぎない。分配論では，人間は制度に制約される。しかしこの制度は，人間の選択によって変化しうる。」換言すれば，生産法則の場合は自然的要因の比重は人間的要因よりはるかに大きい。し

たがって生産については、比重の大きい自然的要因（これ自体は物理学の課題）と比重の小さい人間的要因の結合からくる「二次的法則」ともいうべき生産についての経済法則が扱われることになる。これにたいして、分配法則の場合は、人間的要因の比重が自然的要因よりはるかに大きい。そしてここでは、私有や法規や慣習や競争などの制度からでてくる分配についての経済法則を扱うのであるから、これらの制度を一次的要因とすれば、やはり「二次的法則」ともいうべき分配を扱うことになる。したがって、「生産の法則は、多く自然的要因に依存するのに、分配の法則は多く人間の精神的要因（意志）に依存する」のであって、「生産の法則の依存する 要因と分配の法則の依存する要因とが違うということ」が、まさに生産と分配のダイコトミーの基本的視点であったというように解されているのである<sup>3)</sup>。

こうしてみると、ミルが『原理』の「緒論」とか第二篇の冒頭で、生産がおおく物理的性格のものとして自然法則的であるとか、分配がおおく人間の制度の問題として歴史可変性であるとかと殊更強調して叙述しているのは、このダイコトミーの基本的視点を強いて印象づけようという意図のあらわれともみられることにもなる。しかも実際には生産篇でも分配篇でも、杉原解釈のように決して分断的な一面的解釈をなしているわけではない。この点は早坂説の「生産と分配の実質的理論」をなしている。してみると、第一篇・生産、第二篇・分配という篇別構成が、生産と分配における両法則の決定的相違のためになされたと考えことはあまりに通俗的にすぎるといえない。それならば、むしろ早坂説のように、「ある意味で偶然の思いつき」とか「先蹤に半ばならって、……踏襲しているにすぎない」<sup>4)</sup> と言いきってしまってもよいかもしれない。しかしそれにしても、馬渡解釈で、この篇別分離に特別の理由がみられるとして、次のように論じているのは一考の必要がある。彼は、ミルの叙述：「事物の性質から生じる必然事と社会制度から生じる必然事とを区別しないという、経済学にはあまりにしばしばみられる誤り……こそ、……一方では経済学者に、彼らの主題のたんに一時的な真理を永続的で普遍的な法則の仲間に入れさせ、他方では、多くの人に、永続的な生産の法則（そのために人口抑制の必要性がでてくるような法則）を社会の現在の構成からでてくる一時的偶有事——新しい制度をつくろうとしている人たちが自由に無視できるもの、と見誤らせている」<sup>5)</sup> を引用して、「多くの社会改良家は、すべての弊害を社会制度のせいにする。彼らは、生産の法則のように、社会制度の変化ではいかんともしがたい法則があることを認めない。しかし収穫逓減のような生産の法則は、社会制度をかえても簡単には是正されず、労働者の福祉の向上は、この点からは社会制度の変化ではなく、人口抑制のような超制度的方法によるべきであ

る、というのがミルの永続的法則を一時的なものとみる誤りの批判のポイントであった」として、「ミルの考える社会的変革論を説くには、必要不可欠な理論的な『ダイコトミー』であった」と評するのである<sup>7)</sup>。たしかに、このようなミルの意図は、収穫逓減や人口法則を自然法則的なものとみる限り、正しいといえるし、そうした意図の評価も正しい。しかし先蹤者のいう収穫逓減論は、一定面積の土地に繰り返し同じ単品作物を増加投播するという仮定での立論で極めて非現実的であるし、また人口理論にしても、文明の進歩とともに人口の増殖が等比級数的であるというのも非現実的である。したがってこうした二要因をもって、生産を自然法則的性格のものと規定し強調する程重要な要因とは考えがたいといわざるをえない。とりわけ生産——分配という関係は、むしろミル自身も「実質的理論」で解明しているように、生産手段および労働力の分配——生産——生産物の分配という連鎖で連っており、最初の分配のあり方が生産のあり方を規定し、それがまた生産物の分配のあり方を規定するというように、すぐれて人間的な選択因を強くもっていて、分配の歴史的制度的可変性が主張されることになったといえる。しかしそれなるがゆえに、この分配——生産——分配という連鎖では自然法則性と歴史的変性とは分断されてダイコトミーといわれる程強調される必要はそれほどないようにみられる。

だがそれにもかかわらず、ミルの定立した超歴史性と歴史性というダイコトミーは、今日において真の意味で重要性をもつと強調せざるをえない。それはミルがあげた収穫逓減とか人口理論という点からではなく、すでに杉原解釈で強調されたように、むしろミルやマルクスにも認識されていた物質代謝 (metabolism) というエコロジック的視点からである<sup>7)</sup>。ただミルにしてもマルクスにしても、この物質代謝の過程関係そのものの研究はその認識以上に進んで行わなかった。しかしながら今日においては、この研究の深化は、たんに社会変革のためというよりは、もっと根源的に、自然と人類を含めた生物の生存にとっての重要不可欠性のためである。しかもこの物質代謝論の展開は、ミルが重視した生産—分配の連鎖ではなく、むしろミルが軽視した生産——消費の連鎖の分析が不可欠とされるものである。それは生産における消費（生産的消費）あるいは生活における消費（本来的消費）から生ずるネガとしての生産物が、再び母なる自然に同化されることによってはじめて来るべき生産ならびに生活循環を可能にするからである。しかしながら実は、こうした消費のもつ重要性をミルは理解するまでに至らなかった。むしろ彼は「経済学の定義と研究方法」のなかで述べたように、「われわれは、別個の一科学の主題としての富の消費の法則なるものを知らない。それは人間の享樂の法則以外のものではありえない」<sup>8)</sup> という理解にたって、『原



理』でも基本的にはこの認識以上を出でることがなかったといつてよいのである。したがって、こうした局限された思考からは生産と分配とが経済学の二大研究領域として措定されることになるのも当然で、そしてそこから、生産における自然法則視と分配における人為的法則視というダイコトミーの定式化がなされて、分配的操作による社会改革論の志向となったことは諸論稿の指摘のとおりである。そしてこのことはある意味で、少なくとも伝統的な「経済学」にたいして「新しい経済学」の意義を強調する効果があったことも否定しえない。

しかしながら、今日ではすでに、前述のように、そうした問題次元をはるかに越えて、社会科学的分析における超歴史的法則と歴史的法則との明確な区別と対応が不可欠となっているのであるが、ただこのミルのように、自然的超歴史的法則性が収獲遞減や人口論を起因として重視されるのであれば、歴史法則性との関わりの捕捉が曖昧となってこざるをえず、生産物の分配のみが歴史的制度的なものと関係をもつもののように思考されてしまうことになるであろう。しかし自然と生物とのメタボリズムという超歴史的法則が真に問題となってくるのは、歴史的制度とかかわらしめられてはじめて、その法則のもつ重要性を具現化してくるといえるのである。いわば利潤追求を唯一の目的とする資本の活動は、大量生産——大量消費を必然化するのであって、この陰に自然の同化吸収力を超えた大量のネガの生産物や、さらに自然に同化吸収されない産出物の大量創出を現出する。こうした現象は資本主義制度において頂点に達するといわざるをえないわけで、ここに自然と生物のメタボリズムの崩壊という危機的状況が現出してきているのである。ただ今日、社会主義制度にもこうした危機現象がみられてきていることは周知のことだが、このような事態は、後進的レベルから制度的改革を主軸とした社会主義への転換が、資本主義に追いつき追い越すことで体制の優位を示そうとする政策が最優先されて、そうした目標志向のもとで新技術や生産組織と生産力向上が集権化された画一的計画策定と指令的強圧的管理において強行された結果であり、したがってまた、真の意味の社会主義的理念の具体的構築という本来的目標が副次的なものとされてきた結果の悲劇であるともいえるように思われる。したがって、資本主義制度の分析的課題のひとつは、このメタボリズムの超歴史的法則が資本主義的歴史法則の自己展開のもとで破綻するのを回避するための、体制変革の実践的必要の解明に向けられねばならないことである。それが今日の立場においての歴史法則の解明を超歴史的法則の認識とのかかわりのなかで再考されねばならない理由であろう。

この点にかんがみ、こうした問題認識においてミルのダイコトミーを顧みるならば、

社会科学——経済学にとって重視されるべき自然的超歴史的法則性と人為的歴史的法則性との区別を明確な意識にのぼらせて、社会制度批判なり新しい生き方の構築に向けられたミル努力は、依然としてその重要性を失うものでないといわざるをえないのである。

- 1) 既に示したものもあるが、改めて示しておく。早坂忠「J. S. ミル『経済学原理』第四篇をめぐって」、馬渡尚憲「J. S. ミル『原理』の構成」、井上琢智「J. S. ミルにおける『自由・必然』問題と『生産・分配二分法』問題」。
- 2) 早坂・前掲論文、前掲誌、142 ページおよび 141 ページ。
- 3) 馬渡・前掲論文、前掲誌、133 ページ。
- 4) 早坂・前掲誌、143 ページ。
- 5) J. S. Mill: *Principles*, CW III, pp. 455-56. 末永訳③ 18 ページ。
- 6) 馬渡・前掲誌、136 ページ。
- 7) こうした新しい課題に積極的に取り組む方法的態度は、最近の社会科学や自然科学における新しい展開として注目されねばならないし、されはじめている。そして経済学の領域においても、日本では、玉野井芳郎「エコノミーとエコロジー」・『エコノミーとエコロジー』（1978）所収、および杉原四郎「自然と人間」・『J. S. ミルと現代』（1980）所収、などが注目されるべきである。
- 8) Mill: *Essays*, CW IV, p. 318 note. 末永訳、170-171 ページの注\*。

（しのみや さぶろう 本学教授 経済学）